

# JMMA

JAPAN MUSEUM MANAGEMENT ACADEMY

No. **79** Vol.21-2  
January 2017



たまろくトレイン探検隊広報物



スタジオでCMを収録する参加者たち



車窓に貼り出された参加者の住む街の良いところ



街中を歩く(小平市)



小手指車両基地内で整備士と会話する参加者



まち歩きBEST3をまとめる参加者

平成28年度多摩北部広域子ども体験塾「たまろくトレイン探検隊」の様子

## Contents

- 2 【論考・提言・実践報告】 ミュージアムを拠点とした大規模な体験学習プログラムの考察 ～たまろくトレイン探検隊を事例として～  
.....高尾 戸美(合同会社マープルワークショップ)・藤江 亮介(多摩六都科学館)
- 6 【研究部会開催報告】 平成28年度 第一回 ミッション・マネージメント研究部会研究会 開催報告  
.....高田 浩二(福山大学生命工学部)
- 9 【研究部会開催報告】 JMMAコレクション・マネージメント部会研究部会「教育関係アーカイブの収集・保管・展示の意義」  
.....高橋 修(東京女子大学)
- 14 【支部会だより】 近畿支部会 日本ミュージアムマネージメント学会近畿支部・展示学会合同企画  
ニフレル見学会 参加報告.....幸山 綾子(大阪府立弥生文化博物館)
- 18 【支部会だより】 関東支部会 第12回エドゥケーター研究会「ユネスコ2015年博物館勸告を考えるワークショップ」報告  
.....林 浩二(千葉県立中央博物館)・井上 由佳(文教大学)
- 22 【新刊紹介】『北の学芸員とっておきの《お宝ばなし》北海道で残したいモノ伝えたいコト』  
.....中島 宏一(一般財団法人北海道歴史文化財団)
- 23 【新刊紹介】『日本動物園水族館協会 75年史 1939年-2014年』.....五月女 賢司(吹田市立博物館)
- 24 【インフォメーション】 文献寄贈のお知らせ、新規入会者紹介、法人会員一覧

## 論考・提言・実践報告

ミュージアムを拠点とした大規模な体験学習プログラムの考察  
～たまるくトレイン探検隊を事例として～

高尾 戸美 (合同会社マープルワークショップ)、藤江 亮介 (多摩六都科学館)

## 0. 多摩六都科学館について

多摩六都科学館（以下、「同館」）は、東京都の5つの自治体（小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市）が共同で運営している科学館で1994年に開館した。2014年に策定した10か年計画では、運営母体の5市の生涯学習拠点として、多様な学びの場を創出し、「地域づくりに貢献する」ことを科学館のミッションとして掲げている。

## 1. H28年度多摩北部広域子ども体験塾

## 「たまるくトレイン探検隊」

東京都市長会の助成金事業として上記5市に在住の小学生・中学生を対象に毎年行われている多摩北部広域子ども体験塾（以下、「体験塾」）では、5市と同館とで実行委員会を組織し、実施にあたっては同館が中心的な役割を担っている。平成28年度は「たまるくトレイン探検隊」と題し、多摩北部エリアを沿線とする西武鉄道を活用してプログラムを展開した。夏季に貸切列車で同エリアを巡った後に、まちを散策するプログラム。秋季にその体験をもとに地元の駅のラジオCMをつくるプログラム。冬季にはその作品を発表し、実際にコミュニティFM局で放送するという3段階で構成され、約半年間にわたり述べ700～800人が参加するという大規模な内容である。本寄稿では、この「たまるくトレイン探検隊」の事例紹介を通じて、ミュージアムを拠点とした大規模な体験学習プログラムの考察を行うことを目指した。2章で夏季プログラム、3章で秋季プログラム、4章で発表会と放送、5章で課題と今後という流れで論を進めていく。

## 2. 夏季プログラム「貸切列車と散策で“まちの多様な見方”を発見する」

## ○プログラムの概要

夏季プログラムは、7月25日、7月29日、8月9日、8月10日の4日間終日プログラムとして実施され、各日約60名、延べ240名の児童が参加した。

午前中は西武鉄道の貸切列車（4000系）に乗って多摩北部エリアを巡り車窓からまちを見る。午後は小平駅（小平市）、秋津駅（東村山市）、清瀬駅（清瀬市）、東久留米駅（東久留米市）、東伏見駅（西東京市）の5か所に分かれて本プログラムのために開発した「ま

ち歩きビンゴ」を片手に、自分たちの暮らす多摩北部エリアを散策する。1日の最後に、散策の成果をグループ毎にまとめて発表する、という構成で行われた。

## 【表】一日の流れ

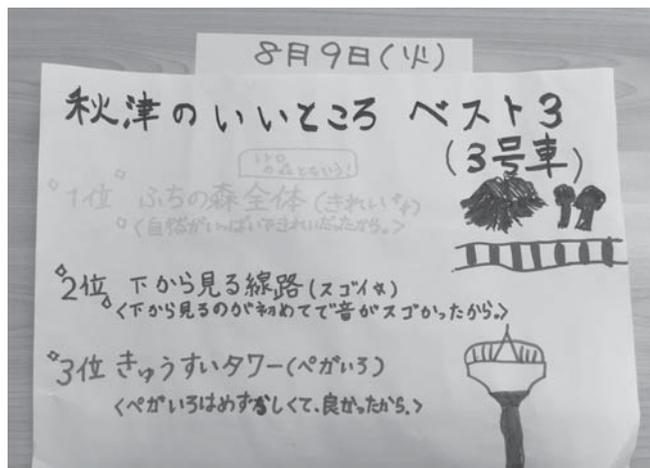
9:00	多摩六都科学館集合
9:15	バスで西武新宿線東伏見駅に移動
9:50	貸切列車に乗車、以後多摩北部エリアを走行しながら車内プログラムを実施
12:00	小手指車両基地の見学および車内で昼食
13:30	5つの駅（各駅2グループ）に分かれて、ビンゴをしながらまち歩きを行う
16:30	多摩六都科学館に戻り、街のBEST 3について話し合い、まとめる
17:00	全体発表会
17:30	解散

## ○プログラムの特徴

本プログラムには3つの特徴がある。第1に、プログラムの運営を青山学院大学ワークショップデザイナー育成プログラム修了生<sup>\*</sup>を中心にスタッフ編成を行った点である。はじめて出会う異年齢の参加者が協力して“まちの多様な見方”を発見する場が必要となることから、参加者同士だけでなく、ファシリテーターと参加者間におけるコミュニケーションを促進するプログラムデザインがなされた。プログラム開発に当たっては、科学館スタッフとコアスタッフの協働で現地視察からプログラム構築を行い、サブファシリテーター研修を実施した上で当日の運営に臨んでおり、事前準備に比較的大きな時間をかけている。また、実施後にリフレクションの場を設けると共に、改善点の反映を即座に行うことで回を重ねるたびにプログラムの質の向上が図られた。

第2に、走行中の車内という非日常環境下で行うプログラムということで、貸切列車内でしかできない特別な体験が提供されている点である。その非日常的な体験を軸に、チームビルディング、午後のまち歩きにつながる学びの要素も加えたインプットも行われた。さらに西武鉄道の担当職員との細かな調整により、鉄道に興味関心の高い参加者にとっても、そうでない参加者も電車を楽しむプログラムにすることが目指されている。





【写真5】秋津(東村山市)グループのベスト3

薦めている見どころスポットだけでなく、インタビューに答えてくれた街の人や、昆虫、つばめの巣、神社のお稲荷さんが唾えているものなど、子供達ならではの発見が数多く散りばめられていた。参加者の個人としてのインパクトは参加者アンケートから伺える。「けっこういったことがある東久留米にしらないところがいっぱいあった」(小3男子)、「町の人にインタビューして、街の人がみんな親切にしてくれるということ」(小3女子)、「ふるいたてものがすごかったよ」(小1男子)、「変な形の屋根」(小4男子)など、印象に残ったものが多岐に渡っており、他者との関わりの中での体験や、個人としての発見などが多重的に生まれていたことが考察できる。

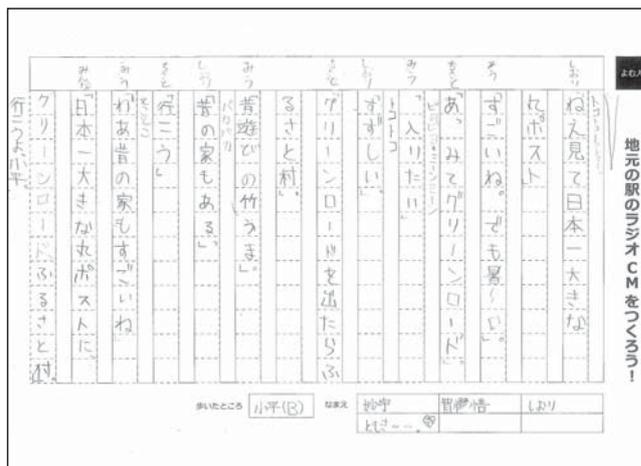
### 3. 秋季プログラム「地元の駅のラジオCMをつくる」

#### ○プログラムの概要

秋季プログラムは9月18日、10月23日、11月6日、11月20日、12月4日の5日間実施され、夏季プログラムとは異なり約40名が5回連続で参加した。初日がFM西東京とスカイタワー西東京の見学会、2日目が夏季プログラムの振り返り、3日目が原稿の作成、4日目が現役アナウンサーによるレクチャー、そして5日目にスタジオでの収録という流れで行われた。夏季プログラムで散策した5か所(小平駅、秋津駅、清瀬駅、東久留米駅、東伏見駅)2グループずつ計10作品が生み出された。

#### ○プログラムの特徴

1つ目は、このプログラムの肝となる原稿づくりの段階で、小学校中学年でも取り組みやすいデザインがなされている点である。実際に放送されているラジオCMを事例としていくつか紹介し、どんな工夫が盛り込まれているかを原稿作成の前の段階でインプットを目指した。具体的には、ナレーションの語り口、場面や登場人物の設定、会話のやり取り、擬態語(オノマトペ)、効果音などに着目していた。各グループの完成原稿をのぞいてみると、それらの要素が埋め込まれていることが確認できる。



【写真6】CMの原稿事例(小平チーム)

2つ目は、グループワークで1つのCMを作り上げる点である。参加者全員が原稿を書き上げた後、各グループで実際にCMとして完成させる原稿を一本化させていくことになるのだが、その過程でナレーション、効果音、会話の登場人物などの役割を分担し、文章を書くことの得手不得手にかかわらず主体的に取り組めるような工夫がなされていた。ファシリテーターが随所にチームビルディングの様々な手法を取り入れ、参加者が相互に意見が出しやすいような関係性づくりが図られたことも奏功したと思われる。

3つ目は、FM局のスタジオでの収録や現役アナウンサーのレクチャーなどにより、参加者が本物感を味わえる点である。単なる発声練習はもとより、言葉で相手に何かを伝える際のキーポイントの学習や、本番用の原稿を読み上げるリハーサルなど日頃学校では体験できないプログラムに目を輝かせる参加者の様子が見て取れた。また、FM局ではディレクターやミキサーなど喋り手以外の職種の方々とも接点を設け、職場体験的な色合いも含まれていた。

これら3つの点が秋季プログラムの特徴といえる。



【写真7】スタジオでCMを収録する参加者

#### 4. CM発表会と特別番組

12月には、夏季から秋季にかけての参加者の体験の共有と、完成したCM作品のお披露目をする場として、同館プラネタリウムシアターで発表会が2回開催された。参加者本人とその家族も参加する事ができ、各日約150名が出席した。

10個のCM作品は1か月間、FM西東京で放送されるほか、今回の取り組み全体を紹介する特番組生まれ、参加者のインタビューなどと併せて作品が紹介された。

現在も下記特設サイトにアクセスすると、その作品を聞くことができる。ここまで本稿を読み進めてくださった方はぜひ聞いてみてほしい。



【写真8】ラジオCM公開特設サイト  
(<http://www.tamarokuto.or.jp/tamarokutrain/>)

#### 5. 現状の課題及び今後の展開について

以上、今年度の体験塾で実施したプログラム全般について述べてきた。本プログラムは、より多くの参加者が体験できること、幅広い年齢層を対象にしていることから、プログラムの内容については、ニーズにあわせ、小学校低学年から中学年程度を想定した構成となっている。しかしながら、同館や科学に興味を持ち、毎年楽しみに参加してくれている層や、小学校高学年や中学生の層も存在しており、彼らのニーズに応えられるよ

うなプログラムデザインを取り入れていく必要が出てきている。具体的には夏季プログラムの体験のアウトプットとなる秋季プログラムにおいて、ICTの活用など、それぞれの層にマッチした内容を組み立てることが求められるだろう。また、本プログラムの実施にあたり、多摩北部地域をはじめ様々な企業、施設、人々の協力を得ており、これらの連携をさらに深めることで、地域のコアとなる科学館としての使命を果たしていくことが望まれる。

今回のプログラムで同館と合同会社マーブルワークショップが共同で開発した「まち歩きビンゴ」については他所への展開を視野に、一層のブラッシュアップを図っている。使用に関してのお問い合わせは、[info@marblews.com](mailto:info@marblews.com) (合同会社マーブルワークショップ 高尾) までご連絡いただければ幸いである。

※青山学院大学ワークショップデザイナー育成プログラム  
<http://wsd.irc.aoyama.ac.jp/>



【写真9】参加者全員で記念撮影(西武球場前駅にて)

## 研究部会開催報告

### 平成28年度 第一回 ミッション・マネージメント研究部会研究会 開催報告

高田 浩二（福山大学生命工学部）

日 程：平成28年12月4日（日）  
10:00～17:00（エクスカージョン含む）  
場 所：広島県立歴史博物館  
（福山市西町2丁目4-1）  
開催テーマ：博物館と探訪する地域発展の足跡  
～ブラ備後をしよう～

#### 開催趣旨

今年度、市制100周年を迎える福山市は、広島県の東部に位置しており、新幹線駅から最も近い福山城や、瀬戸内の物流や文化交流の要所となった鞆の浦などの歴史的な建造物や史跡などにも恵まれている。また隣接する尾道市は、箱庭の港町として日本遺産の第1号にも認定され、鞆の浦と同様に、港町、寺の街、文化流通の拠点として発展注目され、本年は「しまなみ海道」とつながる愛媛県今治市と村上水軍の歴史が日本遺産に登録されるなど、文化的歴史的な価値や今後の展開にも脚光を浴びている。一方で福山市と尾道市は「備後の国」として1つに位置づけられているが、地方統治の経緯だけでなく、武士の町と商人の町といった都市発展の歴史の違い、さらに山や川、海などの地形的な隔りもあり、積極的な文化交流、両地域を回遊的に探訪する活動も不十分であったと感じられる。そこで、今回の研究会では、福山と尾道の都市形成の違いを、産業や交通基盤整備などの歴史を元に、それらの史跡、遺構、現存する建造物等を、地形的地勢的に紐解きながら、新たに博物館職員（学芸員等）が中心になり、これらを観光資源として両者を比較探訪する「街歩き」を提案することで、今後の地方都市における「観光資源を活かした新たな博物館の在り方」を議論することにした。

#### プログラム

##### ① エクスカージョンプログラム（10:00～12:00）

- ・福山城周辺の城の史跡を中心とした街歩き「ブラ城下」を開催
- ・ガイド講師 園尾 裕 氏  
（鞆の浦歴史民俗資料館 学芸員）
- ・参加者 46名（学会員や一般市民対象）
- ・概要  
1622年に築城された福山城は、新幹線駅から最も

近い距離に城壁と天守閣があり「城の中に駅がある」と言っても過言ではない。このため、城を中心とした都市開発だけでなく、戦火による焼失なども重なって、外堀は埋められて宅地化され城壁も崩壊するなど、それらの多くは敷地や建物の地下に埋設されたままになっている。このため福山市では、城の周辺随所にそれらの史実が確認できるよう、各所に標識や説明板などを設置、また案内地図やチラシ等も作成し配布している。しかし多くの市民や訪問客は、それらの存在に気づくことや歴史的な背景に踏み込んで考え感じる機会が少ないのが現状であった。そこで今回の研究会では、単にそれらを博物館学芸員と巡るだけでなく、天守閣からの位置関係、堀が埋められる際に生じた高低差、埋設土砂による水はけ状況など、地勢や地形的観点からも確認しながら、福山の街の歴史的な発展や変遷を、目や耳、肌で触れ込めることができた。やや小雨の天候であったが、予想以上の参加者もあり、また単に地図だけで個人的に探すよりは、詳細な歴史的背景や社会価値を学芸員との双方向の情報交流ができ、午後からの講演やパネルディスカッションに備えての貴重な体験となった。なお、大半の方々は午後のプログラムにも参加した。



写真1 新幹線ガード下に保存された城石垣跡

##### ② オープニング 開催趣旨説明（13:00～13:15）

- 以下参加者51名（学会員や市民）
- 司会進行 高田 浩二（福山大学生命工学部 教授）
- 開催趣旨については前述のとおりであるが、今回の研究会の開催テーマを思い立った経緯について、福山市と尾道市の間で、文化的、人的、経済的な交流が十分されていないように見受けられるのは、地形的な隔り（川や山、海など）が要因か、もしくは福岡と博多の

確執と同様に武士の街（福山市）と商人の街（尾道市）という歴史的な対立軸があったのか、それとも文化や歴史、産業構造などの違いによる住民感情の齟齬なのかと問題提起をしながら、広島県のHPで示された「備後圏の将来都市構想図」を元に、本研究会が、福山市と尾道市が連携と交流を一層に深め、この地域が備後圏の経済・文化・流通の十字路になる機会にしたいと述べた。また、本年7月に広島県立歴史博物館が開催した特別展「ひろしま鉄道ヒストリア」に今回の研究会開催のヒントがたくさん隠されていたことも紹介し、この地区の事例が全国の地域交流や観光振興等に博物館が関わるモデルになればと述べた。

### ③講演1 「なぜ城の中に駅があるのだろう？」 (13:20～14:15)

講師 園尾 裕 氏（鞆の浦歴史民俗資料館 学芸員）

講師の園尾氏からは、福山を代表する歴史的な港町である「鞆の浦」の紹介から始まった。鞆の浦は、瀬戸内海の中央部に位置することから干満の汐待ちの港として、朝鮮通信使の寄港、北前船が往来するなど、船舶による交通や物流の要所として中世の時代から栄えていたこと。また、尾道に比べてコンパクトではあるが、寺院も多く流通や経済、政治、文化の要所であったことが説明された。その後、江戸初期に福山城が築城されることで、政治の中心が福山に移ったこと、さらに、明治に入り山陽鉄道が岡山から広島に延伸しやがて山口方面へとつながることで、完全に物流の手段は海から陸上（鉄道）にとって代わることで、徐々に鞆の浦が衰退していった背景。また、鞆の浦と福山の間に一時期（大正2年）に鞆軽便鉄道が敷設されたが、これも車両交通に運輸事業を奪われた。一方でここが陸の孤島化することで、この地区の街並みや文化財等が開発されずに残されたことは大きく、保存されたこの地域が歴史的景観で脚光を浴びている。一方、福山市は江戸で最後に築城された城を中心に城下町として発展をし、備後地区の政治や経済の中心となったが、この町も明治に入り鉄道の敷設と共に大きく城の周りが様変わりした。当時、城の周りの堀を埋めて土地を確保した商人が鞆鉄の創始者とのことで、鞆の浦の資本が福山の城の景観に大きな影響を与えたことは皮肉である。しかしながら、福山はこの鉄道駅を拠点に物流や産業も戦後の復興に一役買ったが、町の開発は加速し山陽新幹線の開通でもさらに城の史跡保全を脅かした。ただこの城は、「新幹線の主要駅」に最も近い存在であり、名実ともに福山の顔で「城があつての福山」と言ってもいいだろう。講演の最後に、福山の庶民の間で古くから謡われる「尾道トンビに鞆ガラス、福山仏に目を抜かれ」という「俗謡（ざれうた）」で3つ

の地区を鳥や仏になぞらえて地域性や住民心情の違いを紹介し講演はいったん終えた。



写真2 園尾 裕 氏の講演

### ④講演2 「尾道を拓いた海の道・山の道・鉄の道」 (14:20～15:00)

講師 林 良司 氏

（尾道市歴史編纂事務局 嘱託専門員）

講師の林氏からはまず、尾道が昨年、「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市」として日本遺産の第1号に認定されたこと、さらに今年は「よみがえる村上海賊の記憶」として、村上水軍が活躍した尾道や今治地区が再び日本遺産に認定されたこと。さらには今後、出雲の石見銀山から尾道へ運ばれた銀のルートとして3つ目の日本遺産を狙っていることが冒頭に紹介された。これに代表されるように、尾道地区は古くから海運業を中心に港湾の物流拠点として、またそこから陸をつなぐ様々な産業も発展した。また多くの寺院、坂と階段、尾道水道、連絡船などの独特な景観と、この風景や佇まいを拠点に創作された文学、映画作品も多い。近年はネコブームや特徴的な飲食物も多く、愛媛へのしまなみ海道、島根へのやまなみ海道も開通し、人や物流の一大拠点となるなど、備後地区で最も有名な観光地になっている。歴史的に振り返ると、古くは西国街道筋の本通りを軸に、久保町、十四日（長江）町、土堂町の3町が栄えており、旧尾道を構成していた。この地区は地形的にみると、3つの急峻な山と深い谷で成り、山肌には寺院が、谷の部分は入江構造で民家があったようだ。福山市に鉄道が通ったことが大きなインパクトになったように、この町にとっても鉄道の敷設は賛否で町を二分する大きな出来事でもあったが、結果的に鉄道が寺社の参道を分断するように、街のど真ん中を走り抜けたが、その景観が多くの文学作品にも描かれることで市民権を得ていった。尾道にも鞆の浦と同様に北前船が寄港し、北の産物と瀬戸内や山陰の山の道を経由してくる物産などを流通させ、反映したこと、前述の鉄道の開通が尾道の大転換期になったこと

は間違いがない。折しも尾道は3年後の新駅舎の建築に向けてプロジェクトが動いており、これを契機にさらに発展を狙っている。尾道では地元大学生を中心とした活動として、「街は博物館」と題して歴史的な街並みや史跡を博物館の展示品に見立て、学芸員役の学生による解説ツアーも行っており、町全体がミュージアムとして、「ブラタモリ」的に古地図を持って散策する試みも見られた。林氏からは、尾道の勢いを感じる講演がなされた。

#### ⑤ パネルディスカッション 「ブラ備後の楽しみ方」

(15:10～16:45)

パネラー 園尾 裕 氏 林 良司 氏

植田 千佳穂 氏

(広島県立歴史博物館 館長)

コーディネーター 高田 浩二

最初に植田館長より、広島県が備後と安芸の国の区別だけでなく、山間部は雪国で、さらに瀬戸内の島しょ部もあるなど、地形や気候の多様性に富んでいることが説明された。また改めて午前中の「ブラ城下」のルートを振り返りながら、堀の配置や町全体に及ぶ城の地勢的な役割など、さらに詳しい福山城周辺の史跡や街づくりとしての歴史の流れ（古くは中世13世紀以降に反映した草戸千軒遺跡など）も紹介された。またこの博物館は、福山地区にあるが県全体で縁があって活躍している偉人や芸術家なども取り扱って紹介しており、特に頼山陽を愛した女流画人「平田玉蘊」のことも昨年の秋に企画展で大きく扱った。植田館長は、尾道、福山、三次地区なども広く備後の国であるが、それぞれの地区が川や山脈が地形的に隔てていることが、文化交流の妨げになってきたことは否定せず、福山から尾道に越える山に関所が設けられ通行手形が必要であったとのことで、今でもその跡が残っていると述べられた。また県博の役目として、所在地の福山だけに限らず、広く広島各地の歴史や文化を掘り起こして紹介していくことで、各所の縁結びや地域交流の拠点として働きかけていきたいとのことであった。

コーディネーターの役割として、高田が以前に住んでいた福岡も博多と福岡が「博多祇園山笠」でつながって盛り上がっており、このような関係からまずは、祭り好きの両者がつながっていくことが大事であると考えたことから、今後、福山と尾道がお互いに交流と巡回をする仕掛けとして「祭り」を巡ることを提案した。これに対して、園尾氏も林氏も両方の街（園尾氏の場合は鞆）には周年、頻繁に祭りが開催されており、中には祇園祭などはお互いを意識して張り合う部分もあったりすることであった。また、尾道と鞆は海でつながっているのだから、海で交流してお互いの良さを再発見すれば

いいとのアイデアも出された。また県北部に目をやると、山間部では数多くの神楽が知られており競演もある。このような祭りごとにより地域の人々たちが街を誇りに思い歴史をつなぐことで意識の高揚になるとの意見もあった。



写真3 パネルディスカッションの様子

パネルディスカッションの締めくくり、パネラー各人から、今後の展開につながるアイデアや感想を述べていただくことにした。まず園尾氏からは、毎年秋に、鞆に所縁のある人を取り上げた企画展をしているが、鞆を離れて活躍している人を調べるために、博物館のネットワークの大事さに気づいたので、今後もこのような地域を超えた博物館のつながりを深める取り組みをしてほしいとの意見が出た。次に林氏からは、鉄道や祭礼、行事などの企画を鞆の浦歴史民俗資料館と連携していきたいこと。また、学生や地域住民と一緒に尾道学を作り地域活性化につなげ、歴史顕彰が地域興しになり、それを「地域学」と呼び、地域に住んでいる人が主役となって活躍の場を提供したいとのことであった。最後に植田氏からは、博物館は20年間の考古学の経験を展示すればいいものではないと気づいた。地域の立場でものを見ないといけないこと、広島には山間部、島しょ部、都市など様々な地域があり、その活性化のために博物館が歴史的なものを活かして街づくりをしたい。前述の「平田玉蘊」の企画展も尾道を拠点に活躍した画家であるが、おのおのの博物館が役割分担しながら、継続的にできていく仕組みが必要であること。「平田玉蘊」は尾道の話ではなく「近代に輝く広島女性の話」であり大きな意味を持つ。地域地域で縦割れになってはいけぬ。お互いが比べることで良さに気づき、共同作業でお互いが磨かれる。という意見が印象的であった。

#### ⑥ まとめ (16:45～17:00)

江水 是仁 (東海大学課程資格教育センター 講師)

江水氏に、午前エクスカッションも含めて研究会の

まとめをお願いし、以下のようなプレゼンテーションで、本研究会の狙いや目的に対する提言をしていただいた。

今回の研究会の目的は、今後の地方都市における「地域資源を生かした新たな博物館の在り方」を議論することにあつた。そこで、人々の多様性とミュージアムを取り巻く社会の多様性、さらにはミュージアムそのものの多様性に焦点をあて、多様化する社会におけるミュージアムの新たな可能性について考察した。

3氏の講演から、福山と尾道の都市形成の違いを、産業や交通基盤整備などの歴史をもとに、それらの史跡、遺構、現存する建造物等を、地形的、地勢的に紐解きながら、新たに博物館職員（学芸員等）が中心となり、これらを観光資源として両者を比較してきた。福山市には、これからは何もないとは言わせない「今、ある価値、まずはそれに気づくこと」と福山市のHPにも触れられている。園尾さん、林さんの講演からは、今、ある価値に地域の人々は気づいているのか？誰が？誰に対して気づいてもらいたいのか？気づいてもらうことでどうなりたいのか？を考えることが重要だと感じた。

比較することは競争ではなく協奏である。世界の中

で自分たちはどう見られているのか、蟻の目、鷹の目、人工衛星の目など様々な視点から、アプローチは学際的な展開が可能になる。博物館と地域・住民との関わりあいは、よそ者から見たら観光であり、住民や学芸員から見ると観光へのギャップがある。これから、持続可能な地域社会を作り出すための博物館の在り方はどうしたらいいのか。

その答えのヒントを今日のエクスカージョン「ブラ城下」の事例から探ると、博物館は、博物館という建築空間内にモノ（資料）を収集・展示する場であつた。一方、モノは、空間軸と時間軸が交差したことによる必然性で集められたものであり、博物館に収集した時点で、空間軸と時間軸から断絶されている。となれば、現地で資料を保管し、利活用することで魅力を感じるだろうか？いや、モノから資料になる過程で学芸員とモノ（資料）に共有経験があり一般の人々とともに調査・研究が進められるだろう。そうすることで、ほかの地域にはない独自性を住民自身が気づき、その価値を高め、結果的にそれらが観光資源になるのではと考える。（江水氏 PPTより）

## 研究部会開催報告

### JMMAコレクション・マネジメント部会研究部会 「教育関係アーカイブの収集・保管・展示の意義」

高橋 修（東京女子大学）

#### 1 本会の実施について

本会の開催にあたっては神奈川県立総合教育センター（以下、「センター」）の格別の御理解・御協力により実施し得た。普段はなかなか目にする事の出来ない貴重な教育関係アーカイブの展示会、その収蔵設備である書庫見学の機会も設けられたこともあり、大勢の参加者に恵まれた会となった。以下、当日の様子をお伝えしたい。

○日時：2016年12月11日（日） 14:00～16:00

○場所：神奈川県立総合教育センター 善行庁舎

○講座講師：中野雅之 氏

（神奈川県立総合教育センター主査）

○開催趣旨：

神奈川県立総合教育センターでは、平成23年度から本格的に『神奈川県教育史（戦後編）』の編纂に着手し、その一環として、神奈川県内の教育関係アー

カイブの収集、教育史関係の情報収集・整理を行っています。また、これと並行して、これまで未整理であった、戦後検定教科書や県内外の教育資料の整理も進めています。

従来、教科書をはじめとした教育関係資料は博物館等で個別的に収集・展示されることはありましたが、教育関係アーカイブとして体系的に収集・分析されることはありませんでした。そこで、新しいアーカイブの収集・活用の具体的事例として神奈川県立総合教育センターの取り組み事例に学び、新しいコレクション・マネジメントのありようを探る場とします。

当日は、神奈川県立総合教育センターの格別の御好意により、同館で収集・整理してきた教科書・教育資料・教育史関係資料を展示し、あわせてその説明会を開催します。またとない貴重な機会ですので、会員内外の皆様の幅広いご参加を心よりお待ち申し上げます。（同研究部会の会員向け案内チラシより抜粋）



写真1 中野雅之氏による講座の様子

○参加者数：午前の部…55名、午後の部…39名、  
計94名

※参加予定人数が多数であったため、午前・午後の部の2回に分けて実施した

## 2 当日における本会の内容

本会は2部構成から成る。前半は中野雅之氏から1時間30分程度、表題のテーマについての講座、後半は、センター書庫の自由見学の時間とした。前半の講座の構成と内容については次のとおりである。

### 1. 教育センターとは

■教育研究所・センターは、教育一般もしくは特定の教育領域・教育テーマについて調査・研究し、教育技術についての研修を企画運営する施設

### 2. 神奈川県立総合教育センターとは

■神奈川県和学校・在学者・教員（教育職員）数、  
■センターの歴史・機能、■教育図書室の概要

### 3. 教育資料とは

■一般的な資料論、  
■神奈川県立総合教育センターでの実例

### 4. 教科書について

■教科書とは、■教科書の種類、  
■教科書も教育資料の一部、  
■教科書への新しい視点  
～教科書を展示するということ～

### 5. 神奈川県教育史（戦後編）の編纂について

#### ■神奈川県教育史戦前編

（昭和20年8月15日まで）の編集目的、

#### ■神奈川県教育史戦前編の刊行、

#### ■その後の予定、■戦後編刊行に向けて

講座ではセンターの概要について基本的な説明がなされ、センター内にある教育図書室には約23万点もの収蔵資料があることが紹介された。一般に教育センターとは学校教員の研修施設であり、それが教育関係アーカイブの収集という博物館・文書館的事業とどのように結びつくのか、という点にまず興味を覚えた。中野氏によれば、神奈川の教育に関する調査・分析がセンターの研究機能の一環として位置づけられ、その柱の一つに教育史の研究があるとされた。

センターでは既に1971～1979年に『神奈川県教育史（戦前編）』を刊行し、さらに2011年度から『同（戦後編）』編纂事業を開始している。戦前編の目的として、①神奈川県に関する本格的通史を編纂し、近代における教育を総合的に把握すること、②教育問題の根源を歴史に遡って明らかにすることで、今後の教育政策の指針を見出す手がかりとすること、③散逸寸前の危機にある教育関係アーカイブを保全する必要があることが挙げられている。換言するなら、教育史編纂に向けての前提作業として、教育関係アーカイブの意識的・積極的な収集・保管・整理がセンターにお

いてなされてきたといえよう。

その作業の蓄積の結果として、センターでは現在、約23万点にもものぼる膨大な教育関係アーカイブのコレクションを構築・収蔵し得ることとなった。中野氏によれば、これら教育関係アーカイブを「教育資料」と総称し、その特徴として①内容の多様性、②流通の特異性、③整理と公開上の問題の3点を指摘する。

①については、「教育資料」とは教育に関するあらゆるアーカイブ類から成り、具体的には教育に関する図書・雑誌はもとより、教科書、教育現場で作成・授受された様々な書類などから構成されるということである。この多様性こそが「教育資料」の特徴の一つである。

②については、学校現場で作成・授受された教育関係の書類や冊子類であり、一般には入手し得ないものが多いことである。これらは教科書とともに流通の特異性から図書館や博物館等の資料保存機関では収蔵することが困難なものであり、この点にこそセンターで積極的に収集・蓄積されてきたことの意義が認められる。

③については、「教育資料」の上記の特殊性から、分類・整理方法や基準が十分には確立されておらず、試行的に様々な方法を取り入れ、センター独自のものを構築している段階にあること。また、「教育資料」には学校内部の資料も含まれることから、一般には公開し得ない内容のものも多く含まれ、データベース検索システムでは、公開情報と非公開情報とを分ける必要があることである。

こうした数ある「教育資料」の中でも中野氏は展示という視点から「教科書」の活用を提唱する。「教育資料」としての教科書の特徴は、①教育的側面、②資料的側面、③文化財的側面の3点が挙げられるとする。

①については、教科書は国（文部科学省）の検定に合格したもので、学校教育の現場で用いられる図書であることから、その時代ごとにおける国民共通の知識・常識を形成する上で、重要な役割を果たしてきたことである。

②については、教科書は誰もが使用したものであることから、一般の人々にとっては馴染みのある資料といえることである。このことは一般の歴史民俗系の博物館で収集・展示されている古文書・民具類と比較すれば、明瞭であろう。

③については、教科書の記載内容はその時代ごとにおける生活・風俗・習慣と密接に絡み合っていることから、教育学・教育史はもとより文化史・生活史・技術史・美術史・音楽史など多面的な視座から学際的に利用し得る点である。

以上を踏まえ、「教科書」を単に学校での「教材」と捉えるだけでなく、「歴史資料=文化財」として扱い、

それらを系統的に収集・保管・展示等へ利活用することで、教育学・教育史へはもとより、隣接する関連学問分野にも大きく貢献することが期待できると結論付けた。

従来、流通の特殊性という理由から、図書館や博物館等では教科書を系統的に収集・保管してきたことはなく、散逸の危機にさらされてきた。既存の資料保存機関での収集・保管対象から外れてきた、いわばコレクションのエアポケット的な存在が「教科書」であるともいえる。こうした点から中野氏は、教育センターの役割として一般的には研修・研究・相談が主要な柱とされてきたが、今後は「教育資料の収集・保管」もその中に位置づけられる必要があることを主張し、講座の結びとされた。

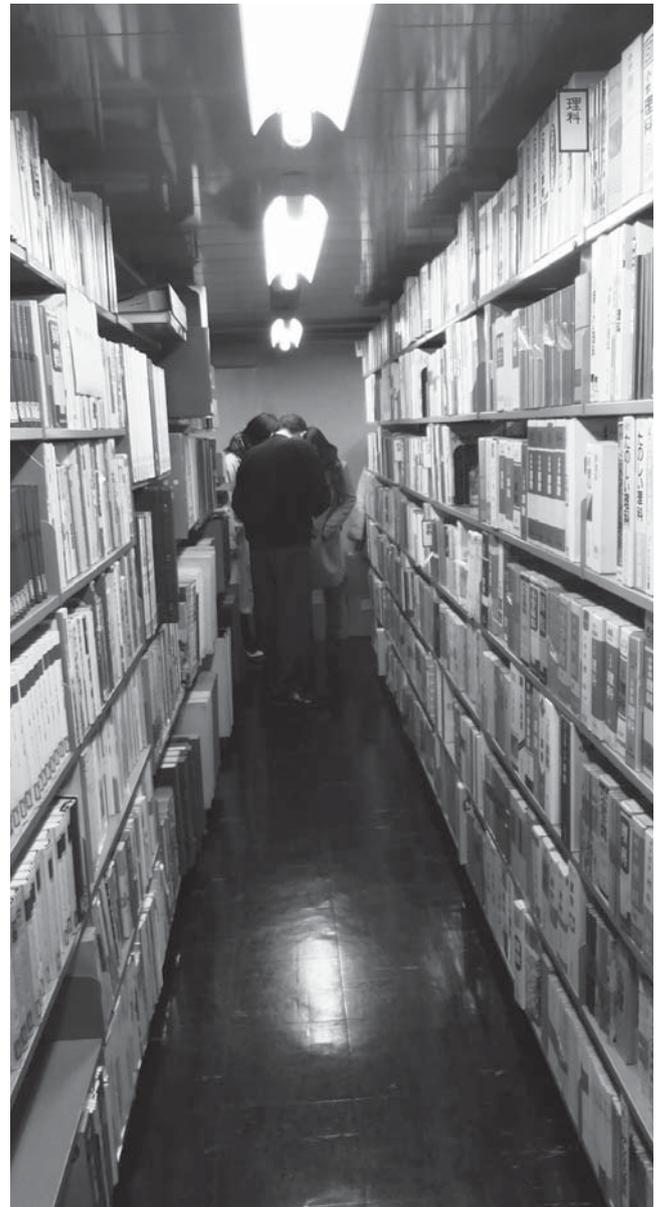


写真2 センター書庫

### 3 本会の感想

講座終了後、質疑応答の時間を設け、参加者との間で次のやりとりがなされた。

まず、センターで収蔵する「教育資料」の公開に関し、個人情報取り扱い等に関する倫理要綱は定められているのか、という質問がなされた。この問いに対しては、センターで収蔵する「教育資料」の全体概況が明らかとなったのは最近のことであることから、個人情報の取り扱い基準は作成途中にある。個々の教育資料の中には公開に慎重を要する内容も含まれており、個人情報の取り扱いについては十分に注意を払う必要がある、とした。

次に、センターで収蔵している資料をデジタルアーカイブ化する予定について、また、デジタル資料の収集・保管にかかる具体的な取り組みについて質問がなされた。この問いに対しては、その具体化に向けて目下、検討中とのことであった。

センターにおける「教育資料」の収集方法についても質問がなされた。この問いに対しては、センターでは神奈川県内の学校に収集・情報提供を呼びかけ続けており、その仕組みはある程度、確立・定着化していると考えられるとした。他の都道府県からの情報収集・交換については、これまでセンターとの関係で継続的に情報収集・交換をしている現状にあるが、近年は郵送費等の経費面の問題から、それらが困難になりつつあるという課題があることも指摘された。

講座及び質疑応答の終了後、センター書庫の自由見学の時間が設けられた。会場内にはセンター収蔵の技術・家庭科教科書を年代順に展示し、しかも実際に手にとって閲覧できるよう御高配いただいた。中野氏の説明によると、家庭科教科書における西洋料理とは、戦後当初はフランス料理が紹介されていたのが、後にイタリア料理に、さらに現在ではエスニック料理に変わってきているとのことであった。講座で指摘されていた社会風俗の変化が教科書に直截的反映されている様子が読み取れ、いずれも興味深かった。あらためて社会の歴史の変遷を探る上で教科書は有益な素材となり得ることを確認し得た。

センター書庫は3層式で、膨大な数量の「教育資料」が整然と書架に保管されている様子が印象的であった。これもセンターの御厚意により、参加者は架蔵資料を直接、手にとって見ることができ、それを巡って参加者同士で思い出話に花が咲いたことも印象深い。講座でも教科書は一般の人々にとって親和性が高いことが指摘されたが、まさに本会参加者が身をもってそれを実証したことといえよう。

以上、プログラム予定どおりの内容を終え、本会は無事に終了した。「教育資料」への着目という従来、注目されてこなかった視点からまとめられた講座、また、センター収蔵の貴重な「教育資料」に直に触れられる機会があったことから、本会参加者にはいずれも大きな満足感を得たのではないだろうか。

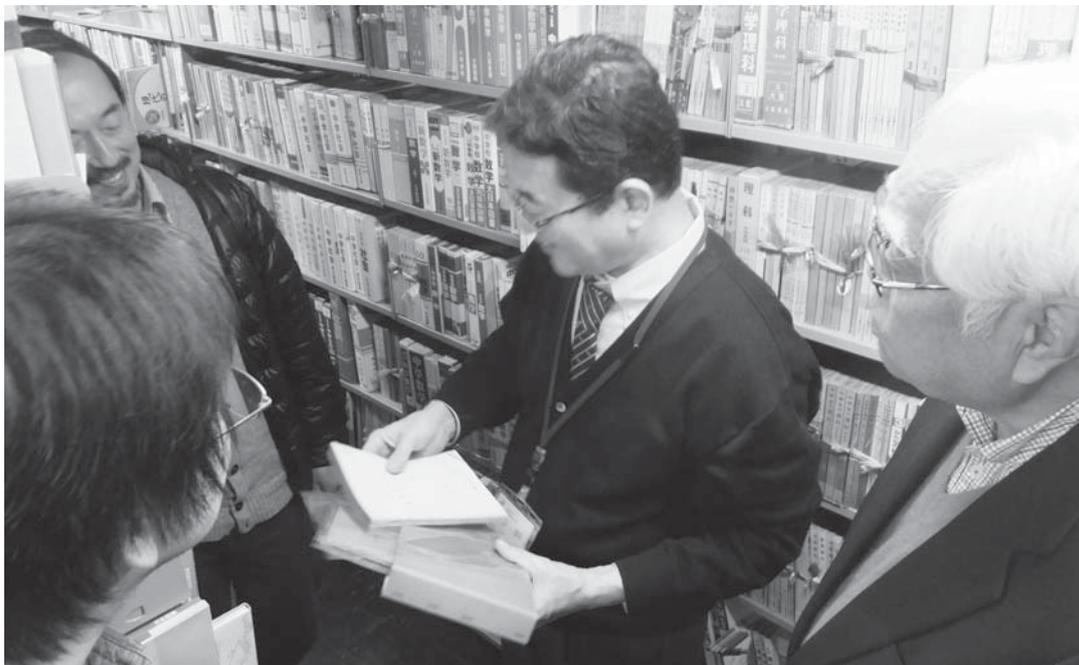


写真3 「教育資料」を手にとりながら、思い出話に花が咲く

最後に個人的な感想を2点述べ、結びとしたい。まず、今回の講座内容で印象的であったのは既存の博物館や図書館等の資料保存機関が取り扱ってこなかったいわば「コレクションのエアポケット」的存在が世の中には数多く存在するという事実にあらためて気付かされた点である。教育関係のアーカイブという最も私たちにとって身近な内容であっても、それを系統的に収集・保管・公開する施設が殆ど存在してこなかったという点は今後、十分に留意しなければならない。また、見過ごされているコレクションの分野が他にも存在し得るからである。

次に、こうしたコレクションを収集・保管・公開する担い手についてである。前回の本部会においては「社史」という視点から、企業アーカイブの収集・保管・活用

という視点について、本会では学校教育に関わるあらゆるアーカイブを「教育資料」として捉え返してそれぞれ議論が展開された。前者については各個別企業が、後者にあつては教育センターがその主要な担い手となり得ることが示唆されている。換言すれば、既存の博物館や図書館等の資料保存機関では取り扱えなかった「コレクションのエアポケット」を収集・保管・公開する担い手は今後、それを生み出してきた各個別組織体が重要な役割を果たしていくことが予想されるということである。社会全体で貴重なアーカイブを継承していくには、博物館をはじめとした既存の資料保存機関はもとより、様々な個別組織体との緊密な連携の上で果たされていくと考えられよう。

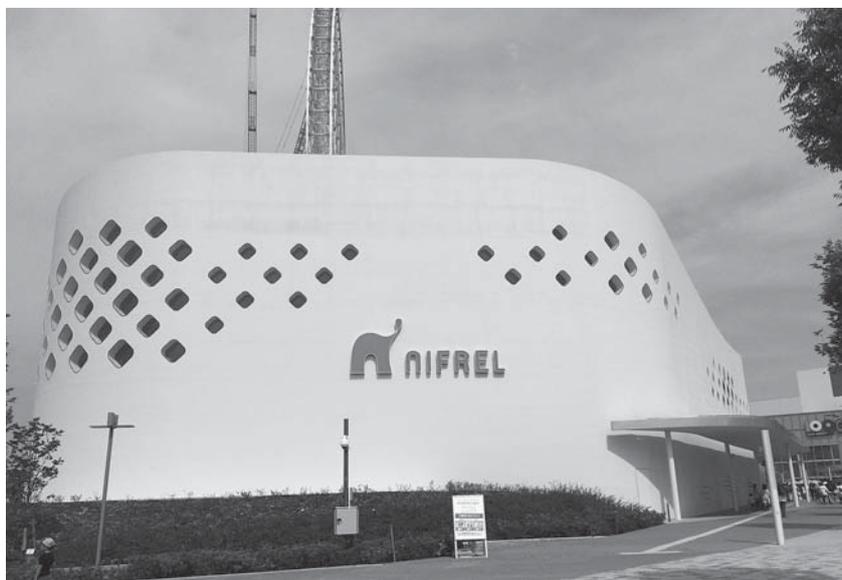


写真4 会場に展示された技術・家庭科教科書

支部会だより

近畿  
支部会日本ミュージアムマネジメント学会近畿支部・展示学会合同企画  
ニフレル見学会 参加報告

幸山 綾子 (大阪府立弥生文化博物館)



○日時：2016年5月23日

○参加者：20名

まず、ニフレル館長小畑洋さんにニフレルの概要などをご説明いただき、館内を自由見学、最後に意見交換の時間をとった。

## I. ニフレルができるまで

## 1) 経緯

エキスポランド跡地にEXPOCITYができることになり、水族館をつくる計画があがった際に、海遊館が名乗りをあげたことから始まる。大阪市港区にある海遊館と、吹田市にできる新館（のちのニフレル）とは、電車でも1時間ほどの距離ではある。そこで海遊館での経験を活かしつつ、新館は既存の水族館とは異なり、水族館・動物園・博物館・美術館の特徴を併せ持つ「生きているミュージアム」を目指すこととなった。

## 2) 館名の由来

海遊館とは別のミッションをもつ新館は、なかなか名前が決まらなかった。海遊館～、エキスポ～、パイオ～など硬い名称ばかり思い浮かびボツとなる中、女性職員の発した「館のコンセプトである『感性にふれる』のニフレル」との一言がきっかけで、ニフレルと決まる。柔軟な発想を受け入れることが新たな発見につながることもあるとプロジェクトメンバーも気づいたそうだ。

## 3) WONDER MOMENTS (ワンダーモーメンツ) の空間

ニフレルはたんに生き物を展示する動物園や水族館のような館ではない。生き物とアート作品によって、生き物や自然に触れる、生物多様性について感じてもらうことが目的である。そこで、音と映像のインスタレーションによる作品で地球や宇宙、草花や生き物にふれてもらう、感じてもらうアートを体験する空間がある。生き物たちの展示室とは異なり、神秘的な演出の暗い空間のため、小畑館長は、子どもたちが怖がらないか当初は不安であったとのことだが、実際オープンすると子どもも楽しんでいることが分かり、安心したそうだ。

## II. ニフレルの特徴

繰り返しになることもあるが、ニフレルの特徴について述べておく。

ニフレルは「生き物を見る」ことだけでなく「触れる」ことを目指している。しかし、文字通り直接手で触れることができるのは、ドクターフィッシュの水槽だけである。「うごきにふれる」の展示室であってもカピバラやフクロウ、ワオキツネザルに手で触れてはいけないのだ。ではどのように触れるのかということだが、既存の水族館のような環境再現型展示ではなく、一種類ずつを（複数種入る場合もあるが）ひとつの水槽に入れ、360度見回せるようにし、生き物と見学者の距離を縮めた。生き物との距離が近くなるとより生態を詳しく観察でき、その

命や個性に気づくなど感性に触れることができる仕組みとなっている。また、水槽の水の透明度は高く保たれている。

来館者が見るだけでなく、コミュニケーションによって生き物とつないでくれる、気づかせてくれる仲介者といえる職員が館内に多数いる。ただの飼育員ではないキュレーターとよばれる人たちである。一般的な動物園水族館とは異なりキャプションが目立たないかわりに、キュレーターとの双方向のコミュニケーションが可能であり、さまざまな角度からより深く生き物のことを知ることができるのだ。

とくにほかの水族館との違いという点から、2点ニフレルの特徴を上げる。まず、海遊館のような大型水族館によくある大型水槽や大型の生き物がいないことだ。海遊館のシンボルである大型水槽とジンベイザメのような展示はニフレルではやらない。そもそも、ニフレルは海遊館の3分の1ほどのスペースしかないので大型プールもなく、したがって、イルカやアシカなどのショウもないのだ。

そして、生息地域ごとの分け方ではなく、色や技、すがた、水辺の生き物などで展示室を分けている。生き物の個性を知ってほしいから、とのことである。

また、展示室は7つのゾーンに分かれているが、展示室の照明は暗い部屋、明るい部屋と交互になっている。また、展示室ごとにBGMも替えてあり見学者を飽きさせないような工夫がされている。水槽の照明は生き物にとってストレスのないようにリアルさを追求したものとなっている。室内照明は生き物を美しく見せるような工夫もされている。

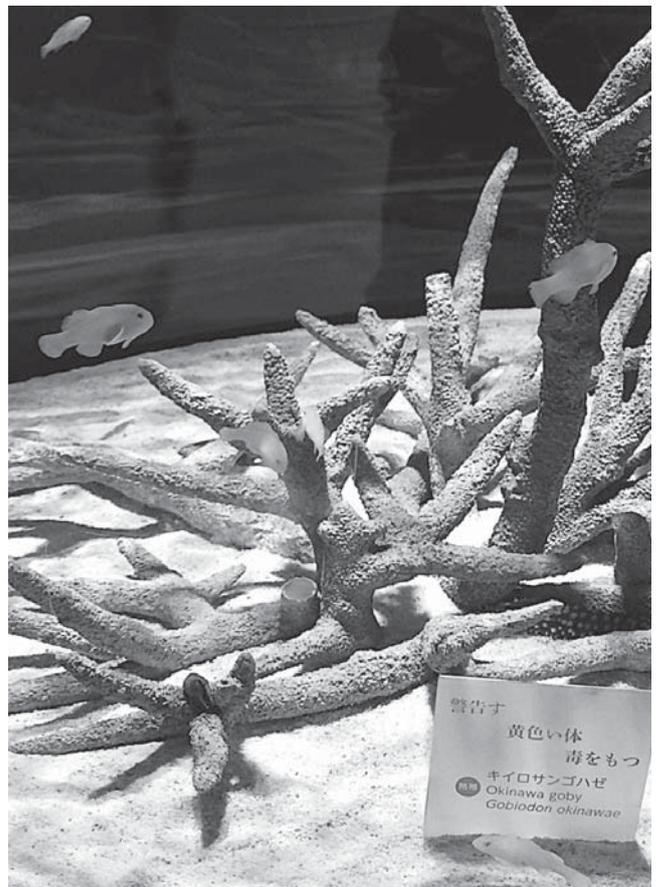
### Ⅲ. 7つのゾーンの概要

ここで各展示室の概要と写真を紹介する。

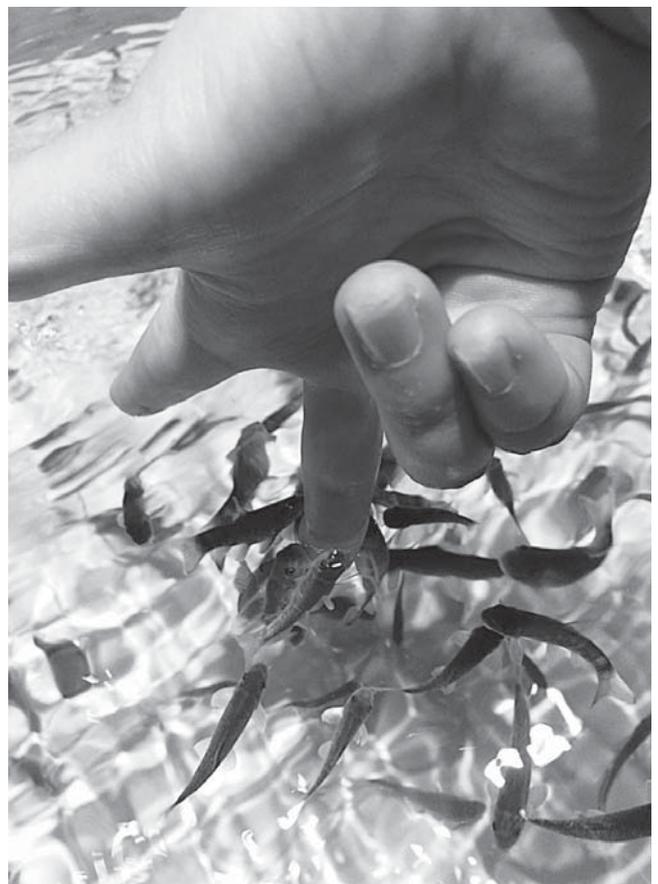
①「いろにふれる」の展示室は、展示室の壁の色も変化する。展示室全体の照明は暗めである。鮮やかな色の魚やエビなどが蓋のない円形的水槽で泳いでいる。生き物例) バイカラードットイーバック・キイロサンゴハゼなど。写真①

②「わざにふれる」の展示室は、技を持つ生き物について、キュレーターの説明を聞きながら観察する。照明は明るめである。ヒトの古くなった角質を食べるドクターフィッシュはここにいる。生き物例) テッポウウオ・ヨツメウオなど。写真②

③「すがたにふれる」の展示室は、無数の光の粒が展示室にちりばめられた暗めの照明である。チンアナゴは姿を観察しやすいように、砂ではなく無色の粒状のゼリーを棲みかとしている。ダイオウグソクムシなど動き



写真①



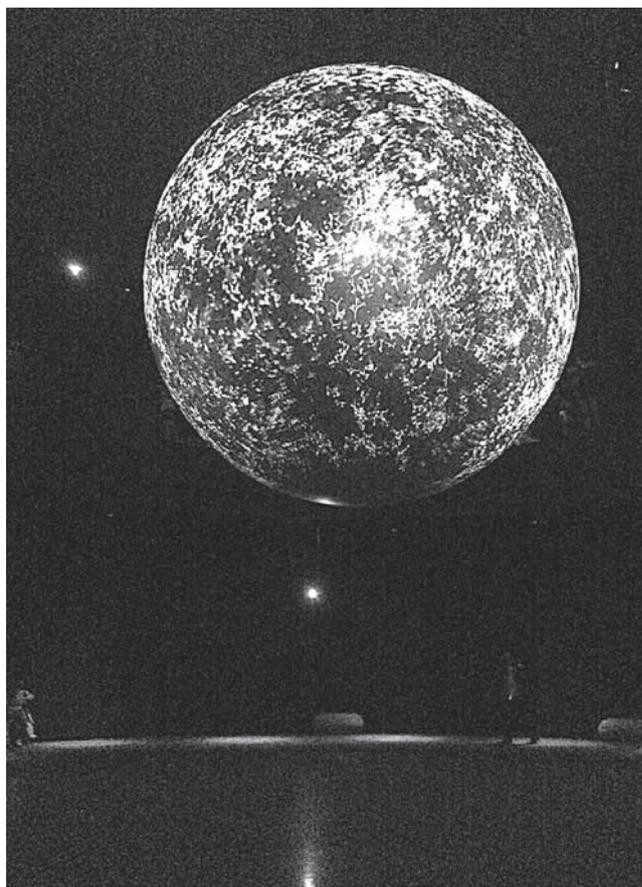
写真②

のあまりない生き物の造形美を際立たせる展示室となっている。生き物例) オウムガイ・ネッタイミノカサゴなど。写真③

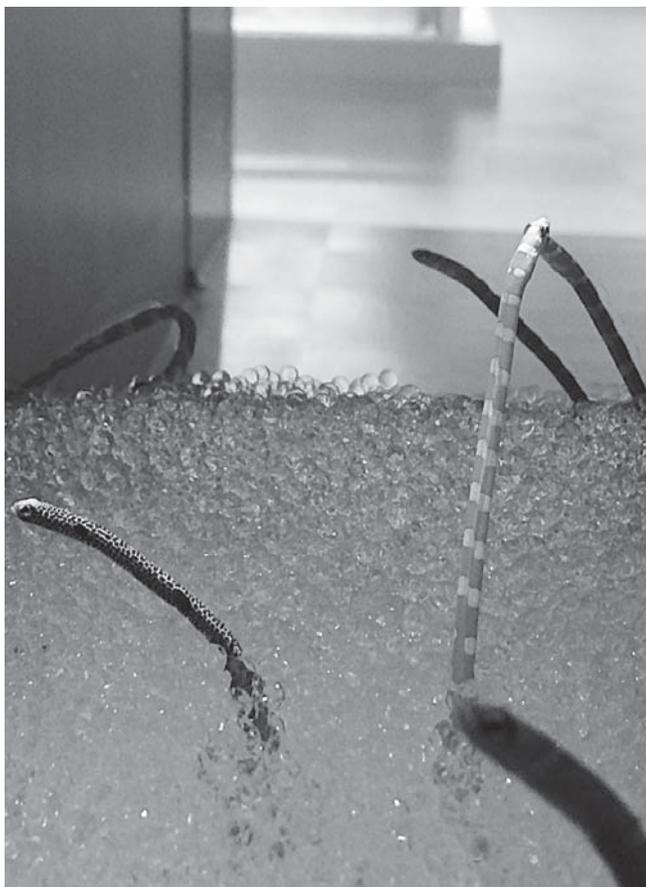
④「WONDER MOMENTS」先に述べたニフレルの特徴的な一室である。1階から2階への導線、腰かけるスペースもあり、小休憩できるスペースにもなっている。写真④

⑤「みずべにふれる」の展示室は、光が射す開放的な空間である。水辺に棲む魚以外の生き物に出会う。カエルからカメレオン、イリエワニ、などニフレルの中では大きい生き物もいる。生き物例) ホワイトタイガー、ミニカバなど。写真⑤

⑥「うごきにふれる」の展示室は、人間は空気のような存在ということで、動物園にあるいわゆる「ふれあい動物園」とは異なり手を触れてはいけない。しかし、自然光の入る明るい展示室であり、柵もなく動物を自然に間近に観察することができる。キュレーターがおり、注意や説明をしてくれる。生き物例) ワオキツネザル・カピバラ・オウギバトなど。写真⑥



写真④



写真③



写真⑤



写真⑥

⑦「つながりにふれる」の展示室は、壁と床にスクリーンを配置する映像展示のコーナーである。「うごきにふれる」の展示室で盛り上がった気分を落ち着けるような、生物多様性についてのメッセージがある。

#### IV. 見学を終えてからの質疑応答

館内見学後、参加者から小畑館長への質疑応答の時間があった。ここでは主な質問について取り上げる。Qは参加者から、Aは小畑館長の回答とする。

Q1：白色を基調にしたのはなぜか？

A1：展示室を先に考えてから外観を考えた。生き物の柔らかさ、万博公園だからパビリオン風に、明るいと広く感じる。

Q2：海遊館との関係、お客の取り合いなどは？

A2：共有。来館者だけでなくバックヤードも補い合う関係。

Q3：動物どうしの関係は？

A3：温かな種を選んでいるが、発情したら隔離する予定。

Q4：生き物側のストレスは？

A4：海の中のほうが危険だらけ。水槽のほうが安全、適応しているように見える。クラゲは弱りやすい。

Q5：解説が少ないのでは？

A5：解説は読んでもらえない。海遊館でも図鑑は売れないので、図鑑はwebにつくる。そのかわりキュレーターがいるので質問してほしい。

Q6：BGMはどのように選んだのか？

A6：空間のイメージと合わせている。専門家に依頼した。

Q7：どんな人材がほしいか？

A7：生き物が好きで、人と動物をつなぐことができる人、そのようなことに興味がある人。

以上、ほかにも質問や感想があったが、有意義な意見交換ができたのではないだろうか。

最後に筆者の感想を述べる。ニフレルは海がすぐ近くにないことから、海の生き物の水族館というよりは海のものも陸のものも、人間も同じ空間で生きているのだと感じることができるミュージアムであった。一歩外に出ると商業施設の敷地なので、ニフレルは疲れた現代人のオアシスのような存在かもしれない、と現実に戻されたのだった。

支部会だより

## 関東支部会

# 第12回エデュケーター研究会 「ユネスコ2015年博物館勸告を考えるワークショップ」報告

林 浩二 (千葉県立中央博物館)・井上 由佳 (文教大学)

### ○はじめに

JMMA関東支部では、各博物館におけるエデュケーター（教育普及担当専門職員）の配置の促進やその社会的地位の向上に資するため、博物館におけるエデュケーターの目指すべき姿や求められる像について、国内外における具体的な実践事例等をもとに意見交換を行う「エデュケーター研究会」を2010年7月以来、継続して開催してきた。

今回の研究会は、利用者と博物館をつなぐ最先端で働くエデュケーターが、博物館の世界的な動きをふまえて活動することが重要と考え、ユネスコの博物館勸告についてとりあげ、ワークショップ形式を中心として実施した。より詳細な報告は後日、別の形で公開される見込みで、ここではその概要を報告する。



【写真1】グループ活動の様子

### ○実施概要

主催：日本ミュージアム・マネジメント学会 (JMMA) 関東支部会  
 日時：2016年12月5日 (月)  
 午後1時15分～4時45分  
 会場：文教大学 旗の台キャンパス 第6会議室 (東京都品川区旗の台)  
 担当者：JMMA関東支部会 (梁川 香澄・高尾 戸美) 事務局 (津久井 真美)  
 企画・報告：井上 由佳 (文教大学)  
 企画・報告・ワークショップ進行：林 浩二 (千葉県立中央博物館)  
 企画協力：稲庭 彩和子 (東京都美術館)  
 参加者数：49名 (博物館・美術館・大学・関連組織等、スタッフ含む)  
 (先着50名で締め切った)

### ○プログラムの概要

本プログラムの主な流れを表1に示す。アイスブレイキングに「持続可能な開発目標」(SDGs)と参加者自身を結び付ける活動を導入することで、参加者がSDGsについて主体的に学ぶ(アクティブ・ラーニング)ことを狙いとした。

また、2つのアクティビティでは、SDGsやユネスコ博物館勸告といった自身の生活とはまるでかけ離れていそうなことを“自分事”として考える活動を行った。1つ目のアクティビティでは、SDGsと博物館の教育プログラムを結びつけてみた。

2つ目のアクティビティでは、ユネスコ博物館勸告と博物館をかけあわせると何ができるのかについて、グループで討議を行った。

ユネスコ博物館勸告や博物館の世界的動向の報告を挟むことで、本ワークショップに関する情報提供も盛り込み、3時間半のとても濃い時間となった。

【表1】ワークショップの流れ

1. 趣旨説明 (梁川香澄)
2. グループ分け
3. アイスブレイキング
4. 報告1「ユネスコ博物館勸告について (1960年&2015年)」(井上由佳)
5. アクティビティ1「SDGsと博物館の教育活動」
6. 休憩
7. 報告2「博物館の世界的動向2016」(林浩二)
8. アクティビティ2  
グループ討議「ユネスコ博物館勸告×博物館=?」
9. ふりかえり

### アイスブレイキング

様々な属性の参加者で集まり、ジェンダーバランスにも配慮して、最終的には5～6名のグループが8つできた。グループごとにSDGs(持続可能な開発目標;文献参照)のカード17種類を配布した。最初は、SDGsの中から各自一つを選び、選んだ理由とともに簡単に自己紹介があった。



【写真2】持続可能な開発目標 (SDGs) のランキング (アイスプレイング)

次にランキング作業。SDGsの17の目標を、グループの合意を元に重要な順に並べる作業に取り組む。一直線に順位付けするのは難しいので、いわゆる「ダイヤモンド・ランキング」とした(写真2参照)。半分のグループには日本はじめ先進国という設定で、残り半分のグループには発展途上国という設定でそれぞれランキングの合意を目指す。10分ほどの作業で大部分のグループでは合意ができ、先進国・途上国それぞれ1例を発表・共有した。

#### 報告1：ユネスコ博物館勧告について：1960年&2015年 (担当：井上由佳、文教大学)

本報告では、勧告の意味を正確に理解するために、最初に「ユネスコ」と「勧告」の定義から話を始めた。「ユネスコ」は、フランスのパリに本部を置く国際連合教育科学文化機関の略称であり、2014年現在で195か国が加盟していること、その主な活動領域として「教育」、「自然科学、人文・社会科学」、「文化、情報・コミュニケーション」を紹介した。この中で博物館に関連する事項はユネスコ文化局によって動いていることと、文化遺産部に所属する日本人アシスタント・プログラムスペシャリストである林菜央さんが2015年博物館勧告の取りまとめ役を担っていたことにも触れた。

「勧告」は日常的にあまり使われない言葉であるが、国語辞典によれば「名詞：(スル) ある行動をとるように説きすすめること」とある。また、ブリタニカ国際大百科事典によれば、「勧告とは、相手方がその内容を自発的に受入れることを前提とするものであって、相手方を拘束する力までもつものではない。」とあり、この説明が博物館勧告を理解する上では現状に即していることを伝えた。

次に1960年の博物館勧告が、フランス代表によるユネスコ事務局への提案を受けて、まずはICOMによって博物館の置かれた現状の国際調査を実施し、その結果を受けて勧告の原案を提案した経緯を話した。勧告の特徴として、博物館が社会において文化的中枢で

あるべきこと、より多くの人々への開放が望まれていること、博物館の教育的役割が明示されていることを述べた。先進的な内容を盛り込んだ勧告であったにも関わらず、当時の日本への影響が極めて小さかったことを一次資料の調査結果として報告した。

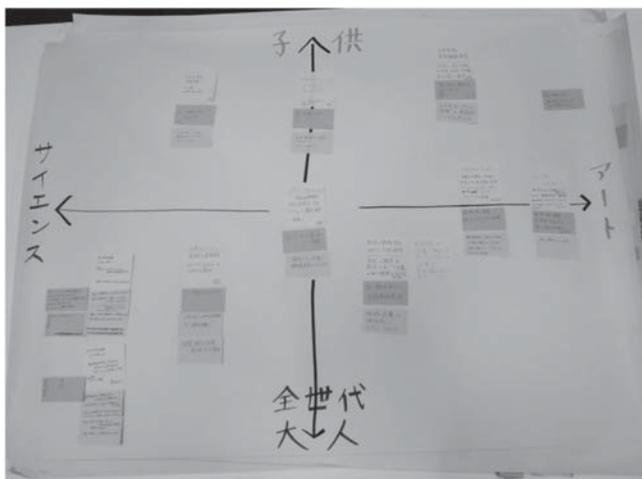
そして2015年博物館勧告は、ブラジル代表からの発案を受けて新しい勧告の策定がはじまり、無形文化財と館外のコレクションもその保護と振興の対象とされたこと、次世代への伝達役としての博物館とコレクションの役割が明示されたこと、教育もその主要な機能の一つとして扱われていることを特徴としている。

最後に2016年11月、中国の深圳にてUNESCO High Level Forumが開かれ、文化行政に関わる要人の間でも改めて2015年勧告の重要性が確認された旨を話した。2019年にはICOM京都大会を控えていることから、日本が本勧告を真摯に受け止め、各館で具体的な動きを見せていく必要性について述べ、報告を終えた。

#### アクティビティ1「SDGsと博物館の教育活動」

冒頭、持続可能な開発目標 (SDGs) について解説した。2015年に国連で合意したSDGsは、2030年までに世界が達成すべき17の目標、169のターゲットからなる。ユネスコ2015年博物館勧告には持続可能性への言及が複数あり、博物館における具体的な活動と結びつけて考えるには、最初は勧告よりSDGsの方が考えやすそうと判断し、急遽、この活動を組み入れることにした。

各自で、所属(あるいは想定)の館における、SDGsの1つ以上の目標と、できれば地域の課題を組み合わせた教育活動をカードに書き出す。現に行っている活動でも、SDGsや地域課題を受けて新たに構想するものでもよい。できれば一人2セット以上出すこと。ヒントは「まちづくり」。



【写真3】SDGs、地域課題と結びつけた博物館の教育プログラムを整理配列した一例(アクティビティ1)

各自1～数セットが出てきたところで、次にそれらプログラムの相互の位置関係をグループ内で考えた。複数のプログラムを何らかの軸で配列する、一種の地図作りで、写真3は成果の一例。グループごとに異なる軸が浮かび上がる興味深い結果で、全グループから発表してもらった。

## 報告2：博物館の国際的動向2016

(担当：林 浩二、千葉県立中央博物館)

博物館の最近の変化として、国際博物館会議(ICOM)の規約における博物館の定義が2007年に「無形」遺産を含むように改定されたこと、更に2016年のICOMミラノ大会の総会では、景観に対する博物館の責任が決議されたことなどを紹介した。伝統的な博物館は建物の中、あるいは展示ケースの中に収まるものを対象としてきたが、その範囲は無形遺産、さらにはエコミュージアムやジオパークのように現地まで対象とするように拡大しつつある。

世界各地域の科学館・科学博物館の団体の代表が集まった第1回世界科学館サミット(2014)で採択された「メヘレン宣言」には、持続可能な社会のための取り組み、市民参加などが強調されていること、このメヘレン宣言は他の館種の博物館にとっても考慮に値する内容であることなどを紹介した。

### アクティビティ2 「ユネスコ博物館勧告×博物館=?」

最後に、ユネスコ博物館勧告と博物館を直接に結びつけて考える活動を行った。ユネスコ博物館勧告を、博物館の具体的な活動や改善につなげてみる。

個々の条文というよりも、勧告の精神を博物館の具体的な活動に「落とし込む」とどうなるか、単語だけでは不可で、主語・対象・動詞+αの文で表現してみる。グループで話し合いしながら、必ず記録するように指示。

最後に各グループから重複を除き2点ほどを発表してもらって共有した。

### ○まとめにかえて

おそらく日本で初めての「ユネスコの博物館勧告」に関する公開の研究会が、多様な参加者を迎えて実施できた。今回の研究会は、もしかすると日本の博物館の歴史に1ページを刻んだことになるのかもしれない。

遠隔地からを含め、また定員を超える申込があったことから、このテーマの研究会に参加者のニーズがあることを確認できたのは、今回の研究会の最大の成果の一つと言えよう。様々な主体によって各地でこのような研究会・学習会が開催されることを強く期待したい。その企画検討には喜んで協力させていただければと思う。

博物館の社会的役割を考えるにあたっては、講義中

心ではなく参加者主体のワークショップ形式で行うべきであると考えてプログラムを組み立ててみた。その成否については、当日の事前・事後アンケートおよび郵送による後日のアンケートを分析して別に報告させていただくこととしたい。

最後になりましたが、至便で快適な会場をご提供くださった文教大学に深く感謝します。また、短時間で感想文をという無理なリクエストにこたえてご寄稿いただいたお二方に厚く御礼申し上げます。

### ■文献：

井上由佳. 2017. (2月刊行予定) 第4章：博物館の国際的潮流と日本の博物館—1960年ユネスコ博物館勧告とその影響の検証—。所収：文教大学国際学部叢書編集委員会（編）『世界と未来への架橋』。創成社、東京。

林 浩二. 2016. 博物館の世界的動向2016. 市民研通信 37号 12pp.

<http://www.shiminkagaku.org/30301020161011/>  
(PDF公開)

林 菜央. 2016. ミュージアムと収蔵品の保存活用、その多様性と社会における役割に関するユネスコの新しい国際勧告の採択. 博物館研究 51(2): 22-24. (通巻572号)

※ ユネスコ2015年博物館勧告

< 英文 > Recommendation Concerning the Protection and Promotion of Museums and Collections, Their Diversity and Their Role in Society.

[http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/images/FINAL\\_RECOMMENDATION\\_ENG\\_website\\_03.pdf](http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/images/FINAL_RECOMMENDATION_ENG_website_03.pdf) (UNESCOサイト)

< 日本語訳 > ミュージアムとコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告

[https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/UNESCO\\_RECOMMENDATION\\_JPN.pdf](https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/UNESCO_RECOMMENDATION_JPN.pdf) (公益財団法人日本博物館協会サイト)

※ 持続可能な開発目標 (SDGs)

[http://www.unic.or.jp/activities/economic\\_social\\_development/sustainable\\_development/2030agenda/](http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/)  
(国際連合広報センターサイト)

### ○参加者の感想 1.

渡邊祐子 (東北大学大学院教育学研究科博士研究員・「Museum Start あいうえの」プログラム・オフィサー)

この度開催されたワークショップは、ユネスコの博物館勧告の周知をはかるとともに、博物館勧告のなかで「ミュージアムが教育に果たす役割」が独立した条項として規定されたことの意味を参加者が理解するための機会として有意義でした。

ユネスコの博物館勧告といった法的拘束力のない「勧告」は、ともすれば現場から乖離した条項として見做されがちですが、ワークショップという体験的な手法を用いることによって、本来実践的な性格をもつ「勧

告」を、博物館現場との関連のなかで生きた条項として確認することができました。今後、こうしたワークショップを用いた、ユネスコの博物館勧告等の国際的動向のクローズアップ化が進めば、国内における博物館教育が、国際的な水準を考慮しながら、制度、内容、方法、精神を見直す新たな段階を歩み始めることも期待されるのではないのでしょうか。

さらに、ワークを通じて、それぞれの参加者の現状や所属する博物館の実態、思想に関して意見交換できたことは、所属を越えより広域な視点から博物館実践や現場を異なる立場の人とともに考えることの意味を、それぞれの参加者に示していたように思われます。

その一方で、わが国のエデュケーターの配置の促進や社会的地位の向上をめざすため、ユネスコの博物館勧告を参照するに際し、国際的な動向に対するわが国の博物館教育のこれまでの歩みや位置付けを明らかにしたうえで議論が進められることは必須であるようにも考えられます。それは、ユネスコの博物館勧告を、何らかの示唆を与えてくれるものとして「受容」するだけでなく、意味内容の検討といった「審議」のうえで理解するなかで、これからのわが国の博物館教育におけるあるべきかたちを探求するための足場を構築することが重要だと考えるためです。くわえて、ユネスコの博物館勧告をユネスコの打ち出す人権思想との関係といった、より広範で細かな内容との関連から再認識することも必要でしょう。

いずれにしても、ワークショップを駆使してユネスコの博物館勧告を体験的に知り、考えるきっかけが、博物館関係者のみならず博物館学を学ぶ学生などの幅広い層を対象として与えられるということは、きわめて画期的であるように思います。このようなワークショップに参加させていただき、手法を知れたことをとても有難く感じています。

## ○参加者の感想2.

笹木一義（日本科学未来館）

本ワークショップは、非常にチャレンジングな機会だったと思われましたが、ICOM（国際博物館会議）に参加しつつ、科学館に籍を置く身から、感想を記したいと思います。

今回のワークショップが行われる少し前に、講師の林さんが執筆されたweb記事の関連で、UNESCO勧告やメヘレン宣言のやりとりをする機会がありました。私は2004年のICOMソウル大会に参加・発表したのがICOMへの初接触で、その後間が数年空きましたが、CECA（教育・文化活動国際委員会）の年次大会やミラノ大会にも参加しており、UNESCOの勧告のことも当然聞いていたのですが、それが自身の博物館の

活動にどう関わっていくのかは、長らく腑に落ちていなかった、というやりとりをしていました。世界科学館サミット（SCWS）でのメヘレン宣言（2014）と、それにICOMが関わっていたことも、たまたま自館が2017年の開催予定館だったから知っていたことであり、ピンと来ていたか、と言われればあやしいところでした。その背景がありましたので、参加された方々がどのような反応をされるのかは楽しみにしていました。

SDGsのカードから始まったワークショップですが、SDGsが「持続可能な開発目標」ということも、私が科学館にいたから知っていたことであり、多くの参加者の方ははじめてのことに面食らっていたようでした。17枚の目標カードに書かれたことが、たいへん大きな「地球規模課題」であり、大事なことはわかるがいきなりそんな大きな規模のことを言われても、という戸惑いも見受けられました。しかし、戸惑われる様子を見ながら、ICOMで発表や勧告を聞いていたときに自身がはじめに感じた印象を反芻していました。「博物館の社会的役割が、日本でここまでクリティカルに求められるだろうか」、「紛争、貧困問題、格差社会がどの国にも大なり小なりあるけれども、博物館にもここまで役割が求められるのはそれらの度合いが大きい国の話だろう」、といったことです。それをフォローするように、これまでの勧告に対する経緯と昨今の状況が講師から解説が入ったのは、必須で的確な進行であったように思います。

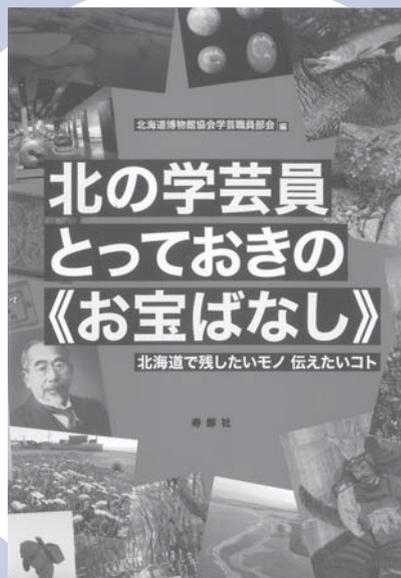
また、館種が混ざって真剣にワークができたことが重要であったと思います。様々な館が集まる会議や研究会の際に、「地域で集まるが館種が混ざっている」場合と、「館種や目的に特化した集まり」の場合、があります。両方に善し悪しというよりは特性があるのですが、今回の研究会は館種が混ざった参加者を、更に均等に属性が混ざるようにグルーピングされました。美術系、研究職、科学系を問わず、SDGsや勧告に対して「ここまでしかできない」というリミテーションをあえて設けずに議論していくことの重要性が垣間見えたと思います。初回からうまく議論がまとまることは難しかったですが、SDGsや勧告が示す課題に対してある領域の館のみで解決できないことは明らかであり、お互いができること、協力して解決していくことは何か、について真摯に考えるきっかけになったように感じられました。

勧告が縁遠いように初めは思えますが、博物館が今何をしなければならぬのか、を考えたときに必要になるから産まれたものであり、それを自身の柱として活用するには館種を越えたワークでの刺激が必須になるのかもしれない。

# 新刊紹介

## 『北の学芸員とっておきの 《お宝ばなし》 北海道で残したいモノ伝えたいコト』

北海道博物館協会 学芸職員部会編  
2016年11月30日発行  
ISBN 978-4-902269-92-5  
発行：寿郎社 定価：1,500円＋税



2013年（平成25）～2014年（同26）に北海道博物館協会学芸職員部会のウェブサイト「集まれ！北海道の学芸員」（<http://www.hk-curators.jp/>）で、51名の会員有志により週一回のペースで連載したコラムリレー第1弾が、学芸職員部会設立40周年を記念して、『北の学芸員とっておきの《お宝ばなし》』（寿郎社：札幌市）として1冊の本になって2016年（同28）11月末に刊行されました。

本著の内容は地域の歴史や文化・風習、人物、生物や大地の痕跡など、実に多岐に亘り、話題満載で、広大な北海道の各地域、そして各専門分野で活躍する学芸員たちが、未来へ残したい、伝えたいと願う51編にのぼる北海道の《お宝ばなし》が熱く紹介されています。

今や190名にのぼる会員を有する学芸職員部会は多様性の宝庫。手前味噌かもしれませんが、この本には、私たち学芸職員部会が有する「底力」と《多様な知と技術の結集》が現れていると思います。

さて本冊子のセールスポイントを2点挙げます。

①51編の多様な話題を盛り込んで1,500円/冊！

51編の話題を盛り込み、343頁なのにこのお手頃な価格。部会取扱いの場合のみ、割引価格で1,500円です。ぜひお申し込みを！

②部会HPよりも読みやすい？！

同じ話題はHPでも読めますが、文体の統一はもちろんのこと、出版社のプロの手により、言い回しや表現を少々あらため、とても読みやすい本に仕上がっています。しかも気になる話題も、お手元があれば検索不要。

お申し込みは、富良野市博物館（〒079-1582 北海道富良野市山部東21線12番地）  
☎0167-42-2407 担当：澤田 健）で取りまとめています。

頒布については次のとおりです。

■博物館割引価格：税込1,500円（通常1,620円）

■送料：1～2冊360円 3冊以上は無料

■ご注文は編集部・富良野市博物館まで希望冊数、氏名・住所・電話番号をFAXでお知らせください。FAX番号➡0167-42-2313

また冊子の内容や頒布の詳細については、JMMA-ML0073でご確認ください。頒布申込書をダウンロードできます。

※北海道博物館協会学芸職員部会（1977～）

…北海道内各地の博物館・美術館・動物園・水族館等に勤務する学芸員有志が集う専門職集団。北海道博物館協会（1961～）に属し、研修活動の場を通じて学芸職員としてのスキルアップと情報共有に取り組むとともに、学芸員それぞれの専門分野を生かして博物館相互の交流と連携を推進している。

（一般財団法人 北海道歴史文化財団 中島宏一）

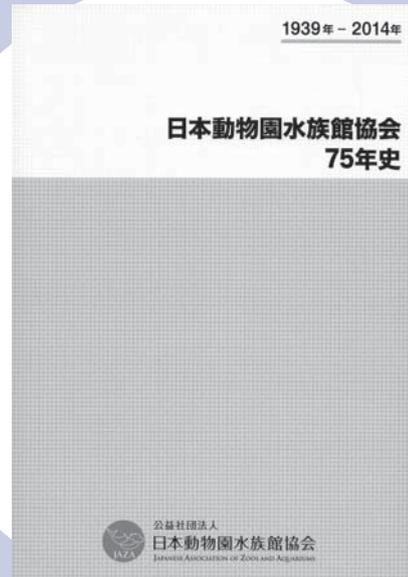
# 新刊紹介

## 日本動物園水族館協会 75年史 1939年－2014年

2016年3月31日発行

発行：公益社団法人 日本動物園水族館協会

定価：4,320円（税込）



公益社団法人日本動物園水族館協会（JAZA）は、周知のとおり日本全国の加盟動物園・水族館によって構成される公益法人として、技術の向上を目指した交流を行うほか、希少動物の種の保存の推進、すべての人々の生涯学習活動への寄与など、その活動は多岐にわたる。1939年11月、動物園16園・水族館3館によって任意団体の日本動物園協会として発足した。2014年度末現在で、動物園88園、水族館63館の計151館園となっている。動物園水族館法も国立動物園・水族館も存在しない日本において、国内外の様々な問題に対処するための機関として、JAZAは重要な役割を担っている。

そのJAZAが2014年に創立75周年を迎え、2016年に75年史を刊行した。構成としては、その歴史、主要事業、組織体制、過去の役員の経歴や人となりの紹介など、JAZAの75年の歩みを網羅しており、75年史と呼ぶにふさわしく、且つ刺激的な内容となっている。

博物館と関係した記載も散見される。

まず、博物館法との関係について。日本動物園協会が発足する以前から博物館令制定を日本博物館協会が文部省に働きかけていた。制定の暁には「全国の動植物園、水族館等は本令により取締りを受くこととなる」との文書が文部省から出されたが、結局1941年の開戦により頓挫したという。戦後、日本博物館協会専務理事・棚橋源太郎が「博物館動植物園法」の案をまとめ文部省に検

討資料として提出、その後1951年に「博物館法」として交付された経緯まで詳述されており、現在に至る問題の根源を知ることができる。

また、2012年のJAZA広報戦略会議からの「いのちの博物館の実現に向けて一消えていいのか、日本の動物園と水族館―」という刺激的なタイトルの提言に基づき、様々な改革が行われたことなども示唆に富んでいる。

博物館関係者、特に歴史系・美術系博物館職員には、動物園や水族館について不案内な人も多い。また、ミュージアム・マネジメント学に関心を寄せる当学会会員にとっても、本誌は「正史」としてのJAZA史や組織体制など、利用価値の高い情報が含まれている。

2018年に創立90周年を迎える日本博物館協会にとっても、意欲的な組織改革を行ってきたJAZAの姿勢が分かる本誌は参考となろう。また、2019年に開催されるICOM京都大会に向けて、海外との活発な交流を行うと同時に、国際的な諸問題に国際情勢を把握した上で積極的に対応するJAZAの姿勢は大変参考になるものである。

（吹田市立博物館・五月女賢司）

## INFORMATION

## 文献寄贈のお知らせ

- 京都府京都文化博物館研究紀要『朱雀第28集』
- 京都府京都文化博物館『2015（平成27）年度年報』
- 北海道博物館協会学芸職員部会  
『北の学芸員とっておきの《お宝ばなし》北海道で残したいモノ伝えたいコト』
- (公社) 日本動物園水族館協会『日本動物園水族館協会 75年史 1939年 - 2014年』

## 新規入会者のご紹介

- 【個人会員】 梶原 健二（福岡女子短期大学）  
金光 研治（金光図書館）  
松本 朱実（甲南大学）  
八木原 美佳（伊勢半本店 紅ミュージアム）  
(五十音順・敬称略)

日本ミュージアム・  
マネジメント学会  
法人会員一覧

(2017年1月末現在)

株式会社 アートプリントジャパン	東京家政学院大学
アクティオ 株式会社	東京家政大学 人文学部 教育福祉学科
公益財団法人 阿蘇火山博物館 久木文化財団	株式会社 トータルメディア開発研究所
株式会社 江ノ島マリンコーポレーション	内藤記念くすり博物館
カロラータ 株式会社	長崎歴史文化博物館
公益財団法人 交通文化振興財団	株式会社 西尾製作所
佐賀県立宇宙科学館	株式会社 乃村工藝社
サントリーパブリシティサービス 株式会社	三菱重工業 株式会社
公益財団法人 竹中大工道具館	ミュージアムパーク茨城県自然博物館
公益財団法人 多摩市文化振興財団	UCC コーヒー博物館
株式会社 丹青研究所	早稲田システム開発 株式会社
株式会社 丹青社	(五十音順・敬称略)
公益財団法人 つくば科学万博記念財団	学会活動に協賛していただいております

JMMA会報 No.79 (Vol.21 no.2)

発行日 2017年1月31日

事務局 〒135-0091 東京都港区台場2-3-4 (株)乃村工藝社 文化環境事業本部内  
TEL/FAX 03-3521-2932

編集者 齊藤恵理、吉岡 伸、津久井真美

HP : <http://www.jmma-net.org/> e-mail : [kanri@jmma-net.org](mailto:kanri@jmma-net.org)

印刷制作 光画印刷株式会社